

さい はっ けん
再発見!

魚類

紀の川の

第43回 特別展解説書

2025年度 和歌山県立自然博物館

はじめに

紀の川は、紀伊半島の北側を西へと流れる流程約136 kmの一級河川です。紀の川にはこれまで200種以上の魚類が記録されており、その多くが今も紀の川で生活しています。紀の川の源流は、奈良県と三重県の県境にある大台ヶ原（標高約1,695 m）にあり、奈良県から和歌山県を経て海へと注ぎます。また、紀の川は、奈良県内では「吉野川」とも呼ばれます。紀の川の流域には、深い森や谷もあれば、町や田畑もあり、そこには多くの生物が生息しています。また、紀の川の魚と私たち人間との関りのなかで、漁業や川魚を利用した食文化も発展しました。

今回の特別展では、特に魚類に注目します。紀の川で一生を過ごす魚以外に、川と海を行き来して生活する魚、人間に連れてこられた魚など、長い歴史の中で様々な魚たちが影響しあい、人間と関わって今日まで過ごしてきました。

とても身近で馴染みのある紀の川の魚類も、よく観察すると思ひもよらない再発見があるのではないのでしょうか。

目次

はじめに	1
第一章 紀の川の姿、いま・むかし	2
第二章 紀の川の魚たち	5
第三章 人間の都合で紀の川へ	24
第四章 紀の川の漁業と魚類の利用の歴史	26
第五章 現在の紀の川、これからの紀の川	29
紀の川魚類リスト	31
おわりに	37

第一章

紀の川の姿、いま・むかし

河口は和歌浦、片男波にあった



*紀の川の水系図と源流・上流域、中流域、下流域、河口域の位置
実線でそれぞれ分けておりますが、河口域は広義の下流域に含まれるため破線にしております。

現在の紀の川は、奈良県と三重県の県境にある大台ヶ原からはじまり、和歌山県和歌山市湊で海へと流れます。古墳時代（約 1,500 年前）には、現在の紀の川河口付近には砂州が発達していたため、紀の川は大きく南へ曲がり、現在の和歌山市和歌浦東付近に注いでいました。平安時代後期（約 1,000 年前）に大水によって砂州が途切れ、河口の位置が変わりました。その後も大水や津波により河口の位置は移動して室町時代（約 500 年前）に現在よりもやや南側へ移動し、1620 年（江戸時代）にほぼ今の位置になりました。その後、沿岸は埋め立てなどの開発が行われましたが、紀の川と和歌浦の間には現在も多くの水路や河川があり、水のつながりは維持されています。



紀の川の河口の位置の変遷
和歌山市立博物館(2009)より改定、黄色は海岸砂州、緑色は陸地を示す。

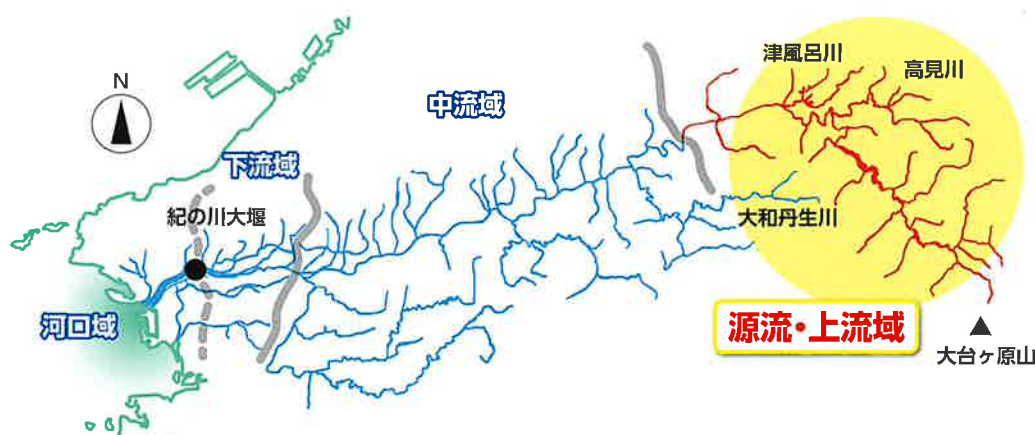
* 紀の川は、奈良県では「吉野川」とも呼ばれ、本書では特に断りの無いときは、奈良県内の流域を吉野川と表記します。また、四国にも吉野川がありますが、こちらは「四国の吉野川」と表記します。

①源流域・上流域の魚類

紀の川の源流域・上流域は、奈良県吉野郡の川上村や吉野町を流れます。源流域では、大きな岩が河原のあちこちに露出し、その間を勢いよく水が流れ、滝も多く見られます。水は山から湧き出しているため、年間を通じて水温は安定し、透明度も非常に高い水域です。冷水を好むサツキマス（アマゴ）などのサケ科の魚や、タカハヤやカワヨシノボリなどの小型の純淡水魚が生息します。

奈良県川上村では、一般の人が水源地の森へ立ち入ることを禁止したり、植林をして大切に保護しています。しかし、近年の気候変動やシカの食害によって山が荒れたり、外来生物の侵入により環境が変化している河川がたくさんあります。

氷期の生き残りと考えられるカジカは、紀の川水系では唯一、この地域にしか残っていません。日本では最も南に分布する淡水棲カジカの集団で、学術的にも重要です。



源流域・上流域の魚類図鑑

汽 … 汽水・海水魚 淡 … 淡水魚 回 … 通し回遊魚

サツキマス（アマゴ）

Oncorhynchus masou ishikawae

サケ科



生活 産卵時に海から川へのぼる個体をサツキマス、川で一生涯を過ごす個体をアマゴと呼びますが同じ種です。

特徴 体側にパーマークと呼ばれる小判状の斑紋が並び、赤い小点があります。

紀の川との関わり 釣りや漁業の対象になります。アマゴは、「あめのうお」、サツキマスは、「のぼり」とも呼ばれます。

カジカ（大卵型）

Cottus pollux

カジカ科



生活 一生を川で過ごす種です。

特徴 胸鰭の鱗条数が少なく、早春に大きな卵を産みます。体長は15cm程度。紀の川流域のカジカは、日本の淡水カジカの分布の南限であり、氷期の生き残りと考えられています。

紀の川との関わり 紀の川上流域では「ばたこ」や「ごりき」と呼ばれ、美味なため食用にされます。

カワヨシノボリ

Rhinogobius flumineus

ハゼ科



生活 一生を川で過ごす種です。

特徴 胸鰭の鱗条数が18本より少なく、近縁種より大きな卵を産みます。体長は6cm程度。

紀の川との関わり 「ごり」と呼ばれ、ごり踏みなどで取られ、ごり味噌などにして食用になります。

ミナミスナヤツメ

Lethenteron hattai

ヤツメウナギ科



生活 一生を川で過ごす種です。

特徴 体は細長く、幼生は眼がなく口は下向きに付きます。成体には眼が現われ、口は犬歯を伴う吸盤状になります。成体は何も食べずに繁殖して1、2か月以内に寿命を終えます。体長は15cm程度。

紀の川との関わり あまり利用されませんが、奈良県川上村では、かつて食用にされていた記録があります。

タカハヤ

Rhynchocypris oxycephala jouyi

コイ科



生活 一生を川で過ごす種です。

特徴 体形はアブラハヤよりもほっそりして、特に尾柄は細くなります。小型の甲殻類や昆虫を食べます。体長15cm程度です。

紀の川との関わり 「はえ」、「はや」とも呼ばれます。食用にもなります。

アブラハヤ

Rhynchocypris lagowskii steindachneri

コイ科



生活 一生を川で過ごす種です。

特徴 タカハヤより、ずんぐりした体形です。小型の甲殻類や昆虫を食べます。体長は15cm程度です。

紀の川との関わり 「はえ」、「はや」と呼ばれます。和歌山県では紀の川水系の一部にしか生息していないため、和歌山県レッドデータブック（2022）で学術的重要種に選定されています。

ニッコウイワナ

Salvelinus leucomaenis pluvius

国外外来種
サケ科



生活 一生を川や湖で過ごす種です。

特徴 体は茶褐色で背側に白点が散在し、体側には小判状の斑紋が並びます。体長は50cm程度になります。

紀の川との関わり 釣りの対象になり、食用にもなります。元々紀伊半島には生息していません。

ブラウントラウト

Salmo trutta

国外外来種
サケ科



生活 ヨーロッパのサケ科魚類で、本州以南では海へ降ることは知られていません。

特徴 体は茶褐色で赤点や黒点が散在します。非常に強い魚食性を示し、体長は最大80cm程度になります。

紀の川との関わり 釣りの対象、食用になります。魚類を中心に水生動物を食べてしまいます。